

近代文学研究叢書

第五十七卷

昭和女子大学

近代文化研究所

近代文学研究叢書

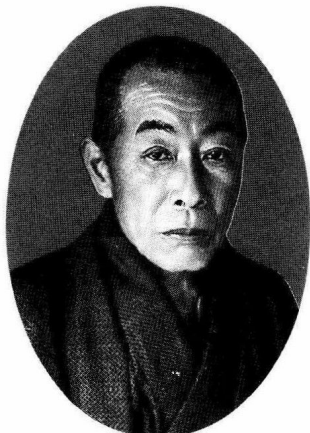
第五十七卷

昭和60年3月8日 初版印刷発行

〔定価 6000円〕

著者	昭和女子大学近代文学研究室
発行者	東京都世田谷区太子堂一丁目七 石 津 純 道
印刷所	大文堂印刷株式会社
発行所	東京都世田谷区太子堂一丁目七 昭和女子大学近代文化研究所 振替口座東京四一七〇八六七 電話(世)五一三一番(代)

近代文学研究叢書



松井簡治
(1863・5・18～1945・9・26)



杉村楚人冠
(1872・7・25～1945・10・3)



薄田泣菫
(1877・5・19～1945・10・9)

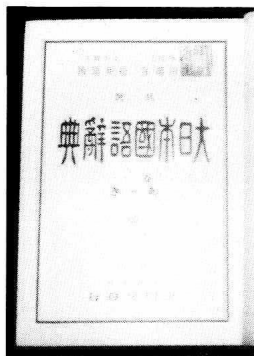


葉山嘉樹
(1894・3・12～1945・10・18)

57
卷

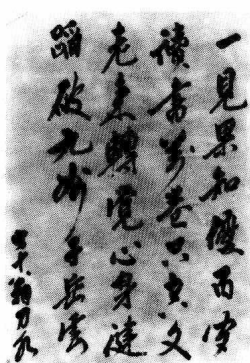
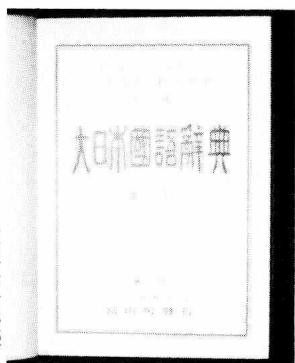


木下杢太郎
(1885・8・1～1945・10・15)



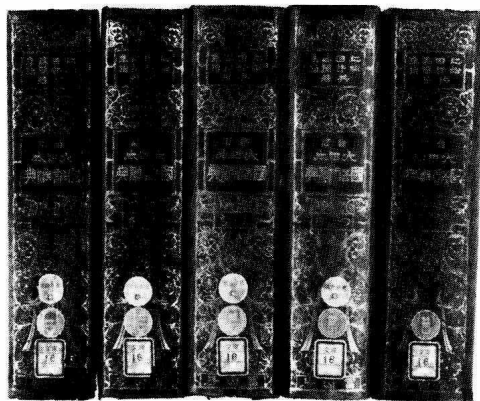
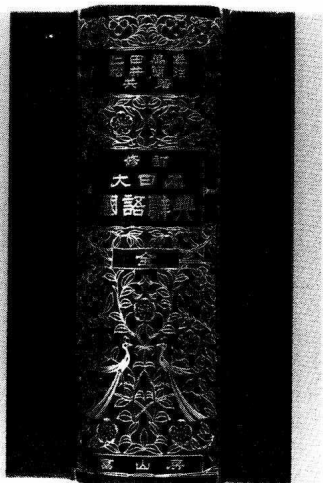
松井簡治

「大日本国語辞典」第1巻～第4巻（松井栄一氏蔵）
大正4年10月～大正8年12月刊



筆跡（松井栄一氏蔵）

「修正大日本国語辞典索引」
昭和3年10月刊



「修訂大日本国語辞典」第1巻～第5巻
昭和14年10月～昭和16年2月刊

「修訂大日本国語辞典」（新装版）
昭和27年11月刊

ほろあつりやうけい
（名） 肺活量をいふ単位
肺活量計

一、海に開けし水も、好時、好風、好雨、好
 月、送るも、水も元氣なれば、外於國、内
 外に、海、新、國、間、が、は、界、し、と、自、盛、に
 あり、し、海、中、如、く、大、に、觀、望、し、
 也、

はびから 灰殻 (名) 厚い赤土の層

儲豐

(S) [Signature]

「辞鏡」(未刊行)草稿

ハイカラ高標 (英 High collar) を云
 (高カラ) の義 ①普通通ふに在ける高、
 カラ。又それを着用する者人、因親
 米の風を好む者人、通ふを云ひ
 又、又人、因好むを云ひ、又ほ
 い流行と追ふ。②その流行物又は
 その服装、因にやれども、軽微なも、又、
 その人、因婢を詳説する語、又、因親

國學院雜誌第二卷第三號

圖書を秘する弊

楊其簡

[illegible]

圖文

松井 剛

新撰聯珠集

新撰聯珠集

[illegible]

源平盛衰記

杜井園記

[illegible]

「源平盛衰記」
明治33年1月
(国学院雑誌)

「新撰朗詠集」
明治31年10月
(国学院雑誌)

「図書を秘する弊」
明治29年8月
(国学院雑誌)

庭訓往來諸抄大成 全

庭訓往來諸材

東京

明治書院

例證

延訓往來は實にしかば深く人々には必ず
課用諸本なりしかば深く人々には必ず
文體には勿論思想の上にも關係せる
史など講究せられん人は必ず
高麗に東ねら

國文學の研究

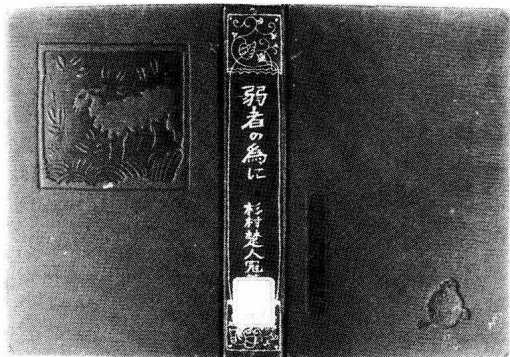
大井 隆士

「国文学の研究」
大正9年8月
(国学院雑誌)

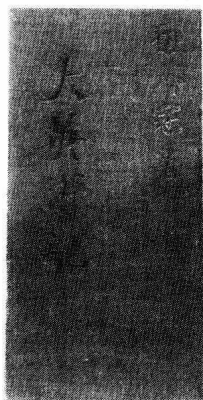
「庭訓往来諸抄大成」 明治36年11月刊

掲載書籍 昭和女子大学蔵

杉村楚人冠



「弱者の為に」 大正5年11月刊



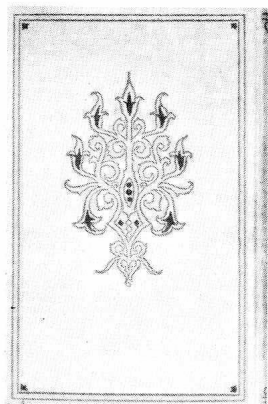
「大英遊記」
明治41年1月刊



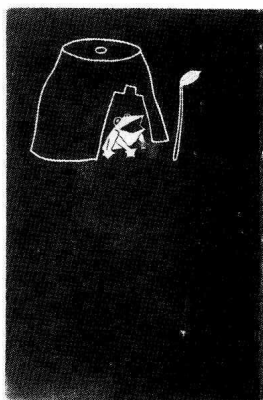
「七花八裂」
明治41年1月刊



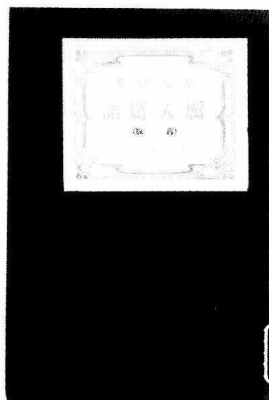
「うるさき人々」口絵
昭和3年1月刊



「新聞紙の内外」
昭和2年3月刊



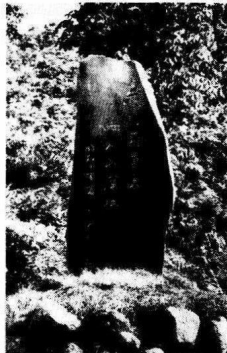
「虫のゐどころ」
大正11年11月刊



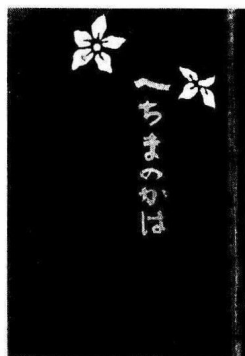
「厲人厲語」(再版)
明治43年4月刊



旧居 一白馬城前景一（千葉県我孫子市）



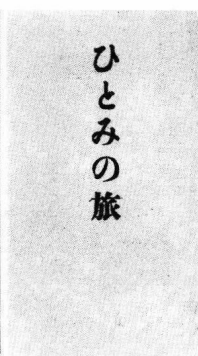
落馬記念碑
(秋田県八幡平)



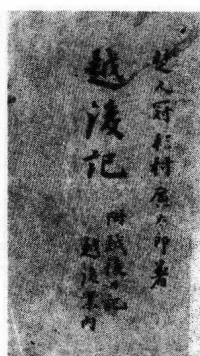
「へちまのかは」(復活版)
大正14年3月刊



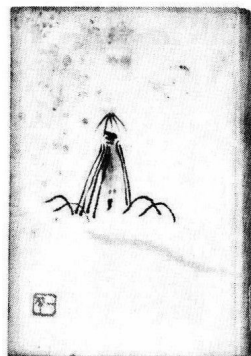
「戦に使用」
大正4年9月刊



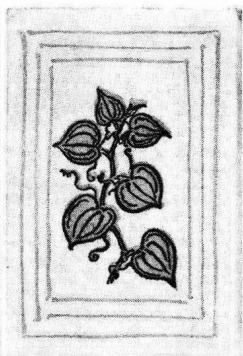
「ひとみの旅」
大正2年9月刊



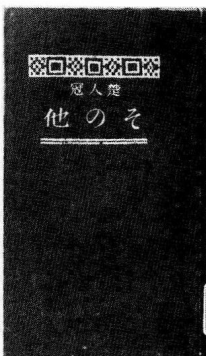
「越後記」
明治44年10月刊



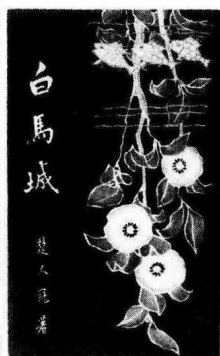
「と見かう見」
昭和11年9月刊



「山中説法」
昭和10年7月刊

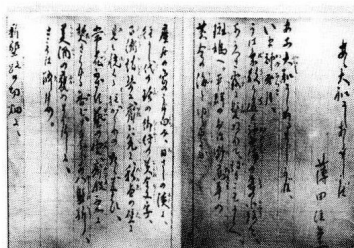
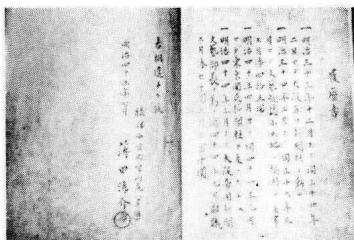


「その他」
昭和4年3月刊



「白馬城」
大正14年11月刊

薄田泣菫



筆跡 履歴書（上・大阪毎日新聞社蔵）
草稿（下・薄田桂氏蔵）



自筆絵葉書（薄田桂氏蔵）



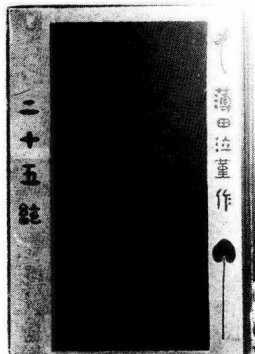
「暮笛集」明治39年5月刊（三版）



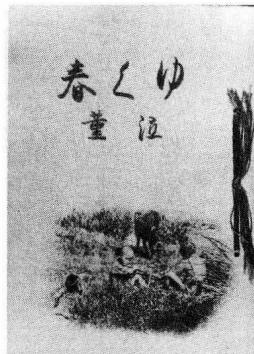
「暮笛集」明治33年5月刊（再版）
（日本近代文学館蔵）



「白羊宮」
明治39年5月刊



「二十五帖」
明治38年5月刊

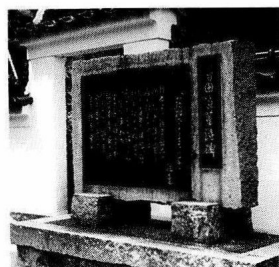


「ゆく春」明治34年10月刊
（日本近代文学館蔵）

詩碑と旧居



詩碑（岡山県倉敷市）



詩碑（岡山県津山市・長法寺）



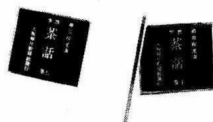
旧居（兵庫県西宮市）



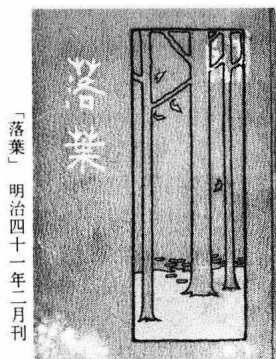
生家（岡山県倉敷市）
書斎として使用した蔵



「泣菫詩集」大正14年2月刊



「随筆茶話上下巻」大正13年3・10



「落葉」 明治四十一年二月刊



「白玉姫」 明治三十八年六月刊



「後の茶話」 大正七年四月刊



「泣菫小品」 明治四十一年五月刊

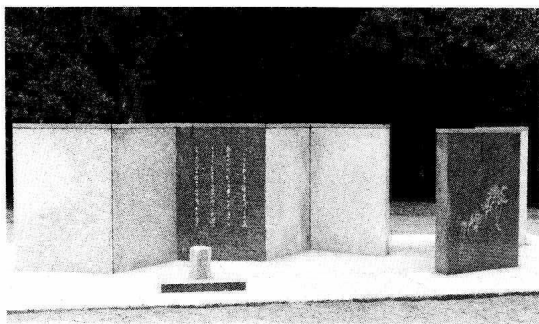


「樹下石上」 昭和六年十月刊

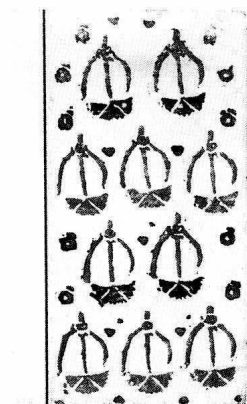


「舂木虫魚」 昭和四年一月刊

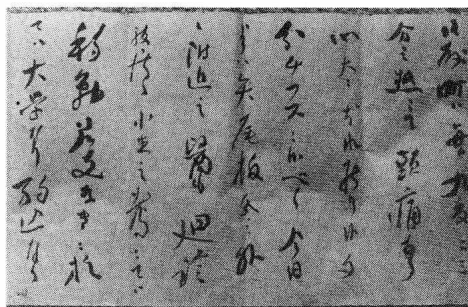
木下杢太郎



詩碑（静岡県伊東市）



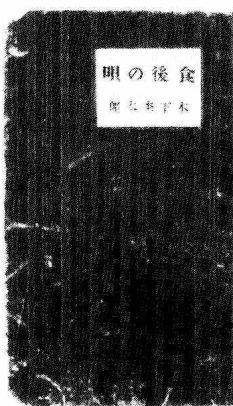
「和泉屋染物店」
明治45年7月刊



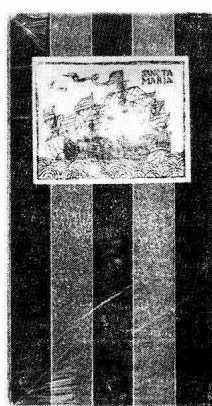
筆跡（木下杢太郎記念館蔵）



「地下一尺集」
大正10年3月刊



「食後の唄」
大正8年12月刊



「南蛮寺門前」
大正3年7月刊



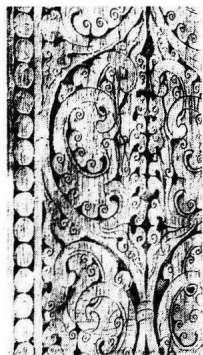
「印象派以後」
大正5年10月刊



「殺倉」
大正4年6月刊



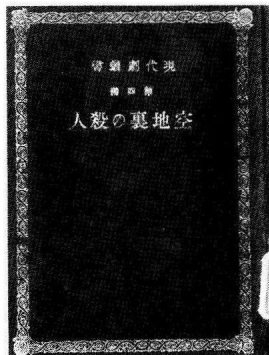
生家（静岡県伊東市）現在木下奎太郎記念館



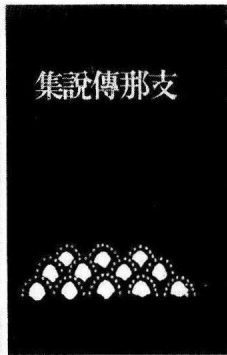
「支那南北記」
大正15年1月刊



「大同石仏寺」
大正11年9月刊



「空地裏の殺人」
大正10年9月刊



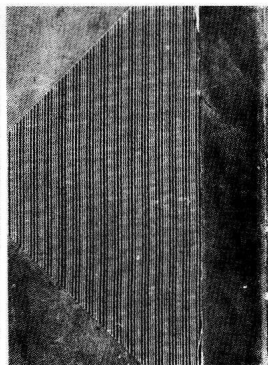
「支那伝説集」
大正10年7月刊



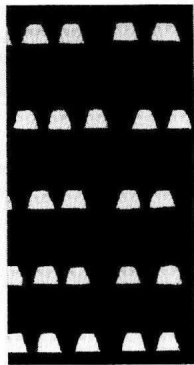
「売りに出た首」
昭和24年3月刊



「蕙南雑稿」
昭和21年9月刊

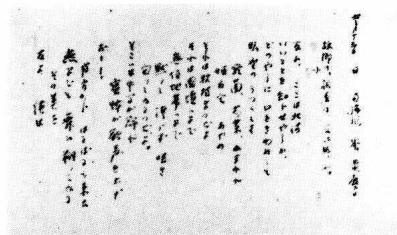


「木下奎太郎詩集」
昭和5年1月刊



「厥後集」
大正15年12月刊

葉山嘉樹



筆跡

「淫売婦」は、嘉樹の代表作である。この作品は、大正14年11月に文芸戦線に掲載された。物語は、東京の下町で、貧しい生活を送る女性たちの生活を描いている。主人公の一人は、貧しい生活を送る女性で、彼女が生きる姿が、読者の心を打つ。この作品は、嘉樹の文学的才能を示す重要な作品である。



旧居（長野県木曾郡山口村）



詞碑（岐阜県中津川市）

「淫売婦」

大正14年11月（文芸戦線）

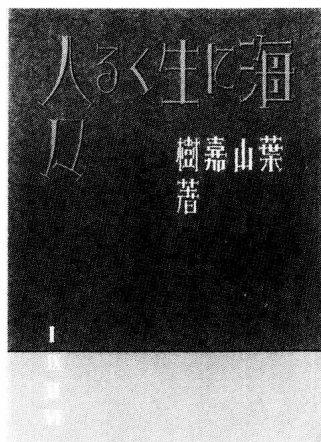
濁流

著 葉山嘉樹



「山谿に生くる人々」

昭和13年3月刊

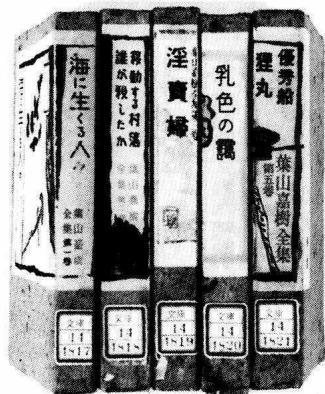


「海に生くる人々」

大正15年10月刊

「濁流」

昭和15年3月刊



「葉山嘉樹全集」昭和22年12月～23年6月刊



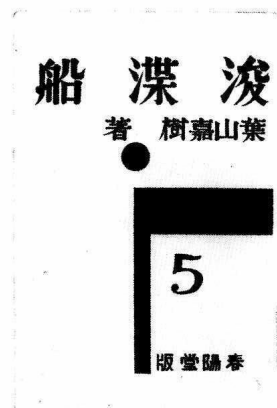
「葉山嘉樹集」昭和4年10月刊



「山の幸」昭和14年1月刊



「今日様」昭和10年8月刊



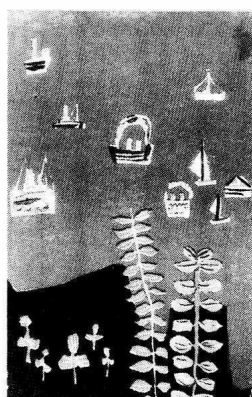
「優秀船」昭和2年3月刊



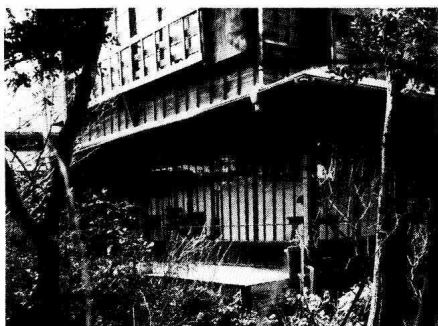
「葉山嘉樹隨筆集」
昭和16年3月刊



「子狐」昭和15年7月刊

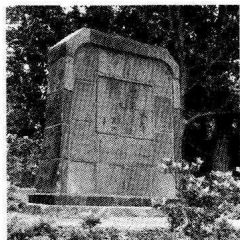


「海と山と」昭和14年2月刊



木下圭太郎旧居
庭と書齋
(東京都文京区)

遺跡をたずねて



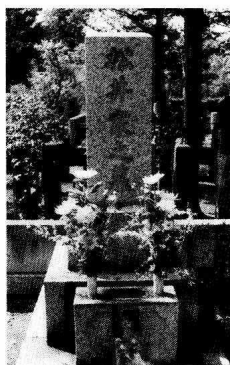
杉村楚人冠公園
記念碑(千葉県
我孫子市)



木下圭太郎墓所 多磨霊園(東京都)



葉山嘉樹墓所 青山墓地(東京都)



松井簡治墓所
雑司ヶ谷霊園(東京都)



杉村楚人冠墓所
八柱霊園(千葉県)



薄田泣菫墓所
(岡山県倉敷市)

目次

口 絵	一
『近代文学研究叢書』の成立	一四
凡 例	一七
松 井 簡 治	一九
杉 村 楚 人 冠	二九
薄 田 泣 堇	三三
木 下 奎 太 郎	四九
葉 山 嘉 樹	五九
PERSONALITY PROFILES	五九
卷 末 付 記	五九
第五十六卷年表補遺・正誤表	五九
索 引	五九

『近代文学研究叢書』の成立

『近代文学研究叢書』は昭和三十一年一月、昭和女子大学光葉会からその第一巻が発行された。以来、明治期全十二冊、大正期全十三冊、昭和期が本巻を加えて三十一冊を刊行、続刊中である。

本叢書は、創立者人見圓吉（東明）が建学の精神に基づき優れた研究者の養成を目的とし、これによって文学日本の近代相がいささかでも究明出来ればという強い願望により創められたもので、本学学生による近世の国文学者、洋学者についての研究調査をまとめた『文学遺跡巡礼』（昭和十三年十月、第一輯発行）が母胎となっている。

昭和二十年、戦争も末期に近づいた四月の大空襲により、本学は校舎とともに蔵書と未発表原稿の一切を焼失した。青年時代、三木露風、野口雨情らとともに早稲田詩社をおこして活躍したかつての詩人東明は、この時から明治の詩書をはじめ近代文学関係の文学書の蒐集にとりかかり、現在の近代文庫の基礎が固められた。神田の古書展では「文学書の値をつり上げる」という評判が立つほどの蒐集ぶりで、こうして蒐められた典籍をもとに近代の文学者、思想家約八百名の伝記、業績に関する資料文献の長大なカードの作成には日本文学系の学生が総動員され、『近代文学研究叢書』の基礎的資料の基盤が築かれたのである。なお、母胎となった『文学遺跡巡礼』はその名の示す通り、生涯と業績に加えて遺跡の实地踏査、遺族の訪問記を特色としたが、本叢